

立 章 ねるのみに我家忘れぬ花見かな

南 江 花の暮視かは下戸といはさぬに

東 里 獅子舞の上手を盡す暑さかな

玉 川 蝶々の町飛ぶ春となりけり

規 月 添寝する母のこゝろが雉の聲

竹 彦 柳から起て行くなり朝あらし

撫 子 友さくらに扇ならして居たりけり

茅 工 さひしさは河にわするよ雨の月

古 橋 唇のうたのうごくよ春の月

十四年。昭和四年三月二十九日。高松市西町。明治三十五年四月一日。千葉縣立佐原

讃岐人名辭書 附録ホ之部

ホ之部 堀

堀 正二

名は元正、通稱正二、父は長三郎母は歌、長男、明治七年甲戌二月十八日香川郡一宮村大字一宮七百五十七番地に生る、性質濃厚にして歴史を研究し子弟を教育す。明治三十五年四月一日千葉縣立佐原

ト之部

梅尾密道

京都六大新報主筆として従来不偏不黨の筆を振はれたる梅尾密道氏は、昭和八年六月二十八日其の出身地仁尾町覺城院に於て遷化され、本葬は翌二十九日同氏の前住地たる同町金光寺に於て執行されたるが年齢未だ筆さかりの人にして、其宗亦斯の如き人を要する時代に於て遷化された事哀悼に堪へざるものがある。

ヲカ之部

奥田林水 名は景之、通稱茂左衛門と稱す、嘉永頃の人、馬場に住せし俳人なり。

花に行く朝や着物の片下り

ガ之部

龜井楚得

元文より安永頃までの人にして祥雲軒と號す、高松市南新町にて菓子商を營み屋號を坂井屋と稱す、師は芳室より曉雲の文豪を傳受されたり。

鶴洲

松巖寺に句碑があり、時代詳明ならざれど文化中高松邊の俳人ならんか。中瀬谷川の水は流れて若葉から

ヨ之部

吉見家の面影

吉見勘太夫尙直

讃岐山田郡宮處（今の木田郡川添村）藤原朝臣吉見勘太夫尙直は人皇第六十一代朱雀天皇の御宇承平六丙申年八月十五日宮處八幡宮を同所に創て勸請此の時三十一歳を以て同社祠官仰付られ。冷泉帝安和元年戊辰二月十九日六十三歳を以て歿す、其の子帯刀直正より同社々職は世襲となる。

吉見民部盛成

名は民部、通稱盛成、對馬守盛種の子なり、元祿十五年三月社職を襲ぐ、享保十三年三月上京於神祇官々職を致し、明和二乙酉年七月より宮處八幡宮本殿再建築を始め同年十月中旬竣立す、今に棟札あり、安永三年八十一歳を以て逝けり。

吉見刑部盛重

名は刑部、通稱盛重、右近盛謹の子にして寛文八戊申讃岐山田郡宮處八幡社職を襲ぐ、同十一年七月上京於神祇官々職を致し元祿八年依願退官し職を嗣子對馬守に譲る、寶永四丁亥年六十一歳を限りに歿す。

吉見對馬守盛種

名は對馬守、通稱盛種、刑部盛重の子なり、元祿八乙亥年二月社職を襲ぐ、同十一年戊寅四月上京於神祇官々職を致し、同十五年依願退官隱居社職を子民部に譲り寶曆二年十月歿す。國學に長じ詩歌を能くす。

吉見相模頭盛邑

名は繁、通稱相模頭後ち盛邑と稱す、岩尾盛久の嗣子なり。文化七庚午年十一月社職を襲ぐ、同十三年四月上京於神祇官々職を致し嘉永四辛亥年十一月依願退官後ち隱居し社職を其の子伊豆頭清雄に譲る、明治二年十一月七十五歳を以て歿す。

吉見伊豆頭盛道

幼名を一馬、通稱伊豆頭後ち清雄と改む、盛道と號す、相模頭盛邑の子にして初め父に學び長ずるに及んで吉成好謙薩摩に就て國漢武學を修め詩歌を能くす。

吉見家の面談

藏谷

通稱俊太、號は藏谷、家を紅花綠葉堂と云ふ、明治四十五壬子年三月六日歿す、年三十五歳なり。法名を淨樂院釋藏谷居士と云ふ。

中院源少將

中院源少將は後醍醐天皇の勅命をもつて讃岐守に任ぜられ、細川氏の勢力を打破して四國に官軍の中心を作ることとなつた。源少將は乃ち讃岐に下向して鶴足郡長尾村現今綾歌郡長炭村大字長尾に城を構へ、その附近の勤王家羽床、大谷川、小龜等諸氏を糾合し、遂に伊豫の土居、得能兩氏と連絡を保つて優勢なる細川氏に對抗した。土居得能兩氏は河野氏の支流なれど伊豫勤王家の柱石にして、其の本宗と向背を異にしてゐたのである。これより讃岐に於ける官軍は源少將によつて統一せられて勢漸く振ひ、北軍の脅威となつた。

正平十七年(一〇二二年)正月清氏は四國を定めて今一度義詮に及ばんと志し弟頼和等と共に和泉國堺浦より讃岐に渡り、從兄弟の細川氏、春信氏及び小笠原宮内大輔等の兵を合し五千餘騎を以て西長尾城に近き阿野郡高屋現今綾歌郡松山村大字高屋の雄山に屯し、陸上では源少將の支持を受け、海止では鮑浦信胤、小笠原美濃守の援護ありて暫時四國を風靡してゐたが、義詮は河野通盛の注進によつて大

いに驚き細川頼之をして之を討たしめた。頼之は備前備中兩國の勢千餘騎を以て讚岐へ押渡り、高屋を距ること約二里の宇多津の青野山に城を修め、同年七月二十三日の夜部將新開眞行に命じ、西長尾城を攻むるまねして清氏の軍をその方面へおびき出さしめ、其の隙に乗じて翌日黎明高屋城を襲ひて清氏を敗死せしめた。尋いで西長尾城も頼之に攻められて衆寡敵せず、源少將は遂に悲壯な戦死を遂げた。

源少將の一子某は西長尾の落城後行方不明であつたが、後ち小松天皇の應永十五年(一〇六八年)頃東讚寒川郡の細川弘氏から石田城を譲られて其の城主となつた。弘氏は高屋役に清氏の敗死したるを以て一族相携へて淡路に走つたが、正平十九年これらの徒また元の古果なる足利氏に復するに及んで、弘氏も舊領石田現今大川郡石田村に歸つたしかし潜有^志滅^{足利}全^{讚史}たる弘氏は、足利氏の指目を避けつゝ尙南朝のために旗揚げの機会を窺つて居る中院氏の遺族を、其の城内に隠匿庇護して居た。かくて四十五年を経過したる應永十五年に義満が死したるを以て、弘氏は新に築きたる國弘城に移り中院某は長町氏と稱して石田の城主となつた。この新しい苗字は源少將の居館が鶴足郡長尾村町代に在りしに因み、南朝の忠臣であつた往時を偲ぶのよすがとしたのである。

長町家と長町出雲守

元龜天正の頃、土佐の猛者長曾我部元親が暴れ出して、宛ら巨蟒の深山から出でたるが如き勢を以て伊豫に入り、更に鋒を轉じて阿波を侵し、遂に天正六年讚岐に入り來つて先づ西讚の重鎮香川氏を降し、長尾大隅を服してその西長尾城を奪つて讚岐計略の根據地となし、徐々^々に東讚に進んで香西氏を平げ、虎丸、引田、雨瀧諸城を陥れて十河、安富諸氏をも其の大腹に呑み盡したれば、獨り石田城のみ其の厄から免かるべき筈なく、天正十一年(二二四三)五月これも亦運命を俱にした、時の石田城主は長町出雲守と稱し、京都の公家九條家より來て養子となり、長町家を相續してゐた者である。後その城跡に眞宗光明寺が建立せられて現今に及んで居る。

長町氏略系(村上源氏)

村上天皇——具平親王——源師房——顯房——雅兼——定房——定忠……源少將……孝家——家盛——孝盛

(津田移住) 秀盛——忠久——賈茂——賈路

茂時——茂通——茂厚——茂寛——茂孫——茂幸——茂康 (博相)

(羽立ニ別家) 忠興——春好——忠春

(魯州) 與八郎——繁太郎——與彦——昭彦

山 瀬 田 氏

ク 之 部

山 本 古 菫
日 下 蔓 衣

乙井の妻である、俳句を能くす。片隈に居れども春の寒さかな

讚岐人名辭書 附録ナ之部

ヤケ之部 附録ヤケ之部

日下 蔓 辻
山本 古道

古道は元文年間芳室の庵號甘室泉室を嗣ぎたり。

山崎 柏舟

高松市紺屋町に住して易を業とした、天明元年通俗志なる、俳書を出版し後ち之を解約して俳諧通俗志筆節早合點と改めて普及をはかつた文化の始めに歿す。

あけのこる星三つふたつほととぎす

ケ之部

立甲 齋 龜山

安政萬延頃の人にして、高松市西通町龜田屋の主人なり。日下乙井安原三三等は其の高弟である。天保の初年歿す明治十一年箕虫の篋も通さず初しぐれ

フ之部

藤本 蓼也園

高松藩士蓼也園五視と稱す、若き頃より俳諧を好み文政天保の時風に投じ名はるる、遠く芭蕉に復せんと企てし程の妙手なり門流甚だ多く、日下乙井安原三三等は其の高弟である。天保の初年歿す明治十二年の冬其の子槐屋より遺集「記念の言の葉」世に出だされり。

福守 梅居

安政五年六月玉藻集を刊行す。
吹くほどに海もさわがず春の月

コ之部

近 藤 要

高松市今新町の出身にて東京本郷區駒込千駄木町二八四に現住す年三十歳。東京美術學校彫刻科塑造部を昭和六年三月卒業、昭和四年十月在學中帝國美術院展覽會に出品入選、氏の力作視るべきもの多し將來有望なる人たり。

テ、其ノ末ニテ、部、人、式、

汀

花

俗稱を中村久知と云ふ、赤澤古行の統を嗣ぎし俳句の妙手である。

ア、其ノ末ニテ、部、人、式、

赤澤古行

名は古行、號を朝顔庵又然々房と云ひ、其の句風一種特有のものがあり又俳諧もよくした、四友庵の門人平賀源内と親交ありしこと源内傳記中にあるを以て蓋し明和、安永、天明の頃の人であらう、在來の諸書に文化文政頃の人としてゐるのは疑問で、高松市西方寺山下松巖寺にある古行翁之塚の側面に寛政二年庚戌八月三日汀花建立とあるのによつても文化には既に遠く歿し去つてゐることが明である。

(詳細を之に更め再録す)

キ之部

京極對馬守高美

公諱は高美、對馬守と稱す、丸龜の城主長門守高朗君の世子なり、文政元年江戸の邸に生る、幼名を富丸と云ふ、又松圪と號す、少より文事を喜び武技を愛し、刀槍弓馬、皆已に堂に至る。就中尤詩賦に巧にして又文字を能くせり、始め學を家臣加藤梅崖、岩村南里に受け、後ち大窪詩佛に學び、殊に文字の如き欸章なきものは人皆以て詩佛となすに至れり、公天資明敏寛厚、喜怒色に見はれず、親に奉ずるに孝敬、下に接するに寛容、衆皆其賢才を仰ぐ、殊に身を持つること方正謹直にして在世二十有餘年の間、未だ曾て定省の缺がず、人皆之を偉とす。夫人淺野氏、美にして賢なり、溫良貞淑、閨門相和し琴瑟相樂しむ、曾て幕府に仕へて寄合に列せられしが。又水戸烈公の知遇を受け、公の推薦に因り將に若年寄に擧げられんとせしに、不幸脚氣衝心に罹り遽に卒す、實に弘化二年七月十五日なり享年僅かに二十有八上下之を惜む、蓋して玄機院殿前對州刺史徹山道關大居士と云ふ、江戸駒込龍光寺に葬る、後又更に靈塔を近江國清瀧寺に建つ、蓋し其の平昔を欽するなり、侍臣三谷助市棺蓋に銘し之を埋む其文に曰く

故圓龜の世子京極對馬守、諱は高美、父長門守諱は高朗、母は主計頭酒井忠道之女なり、文政紀元戊寅四月十二日、江戸新橋の第に生る、公性謹恪、親に事へて孝養、下を御する寛厚、暇日あれば文略を講習し間斷なし、凡百の玩好一も懐に介せず、土庶翕然盛徳を頌せざるはなし、弘化二年病んで卒す、實に中元なり。享年二十有八駒込龍光寺に葬る、浮屠諡して玄機院徹山道關と云ふ、室

續載人名辭書 附録キ之部

浅野氏近江守長訓之女なり。子無し銘に曰く(原漢文)

孝敬仁信 業善兼全 有徳無壽 伯魚子淵

賤 臣 三 谷 堯 民 謹 誌

本書は侍臣瀬山登君の手記、心の技折、及び堀田璋左右君の教示と、余と舊聞を録し之を草す。

シ之部

繁也亭路彦

俳人なり。

遊ぶ日は袂ぬらさん春の水

柴田 關 鶯

甚右衛門と稱す、文化頃高松の俳人。

水馬休まんとして流れけり

讃岐人名辭書 (第二版) 終

昭和三年八月十三日第壹版發行

昭和八年十一月五日印刷

昭和八年十一月十日發行(第貳版) 【定價 金五圓】

香川縣高松市西通町三番地

著作兼 發行者 梶原猪之松

香川縣高松市内町九十八番地

印刷人 香 西 榮 太 郎

香川縣高松市内町九十八番地

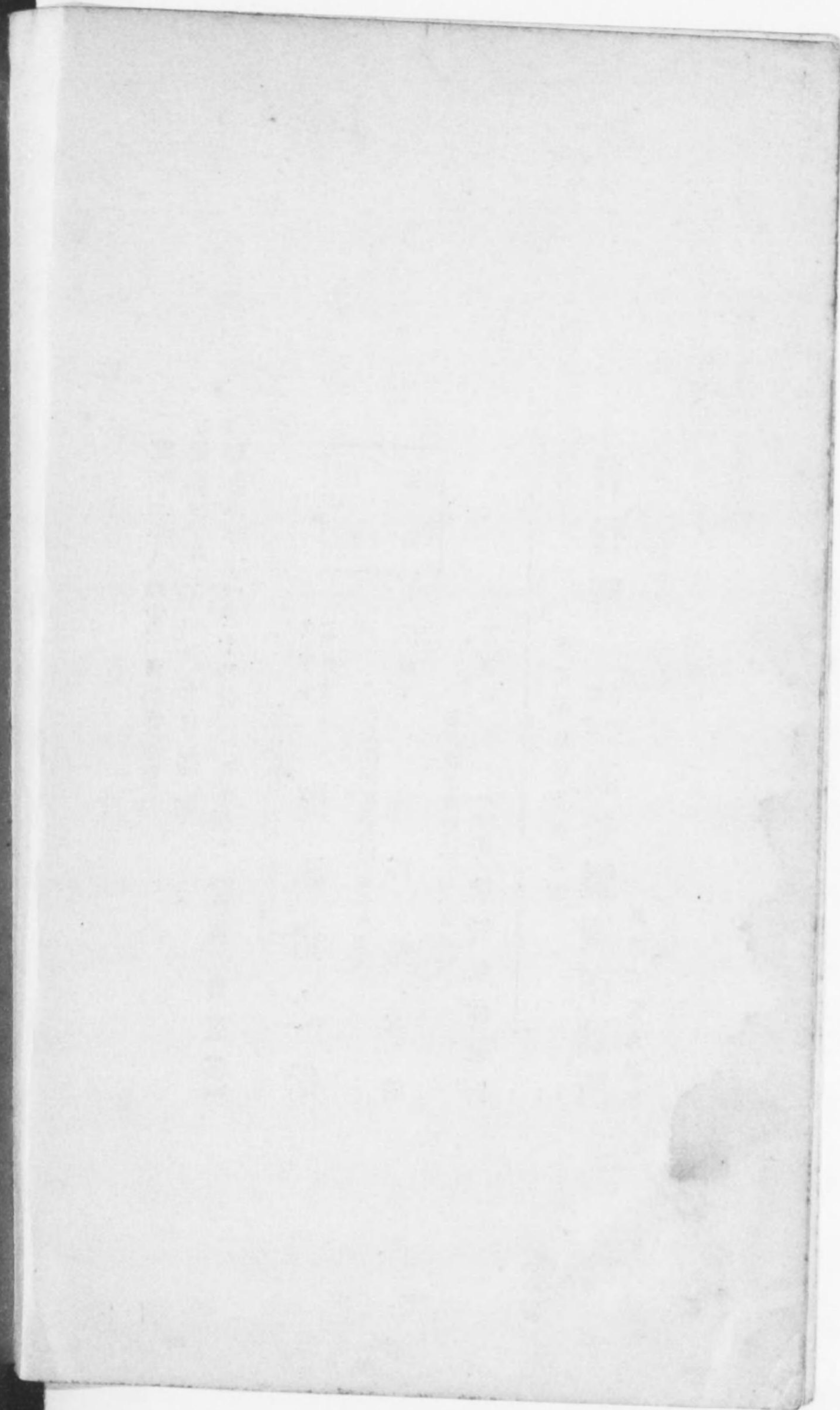
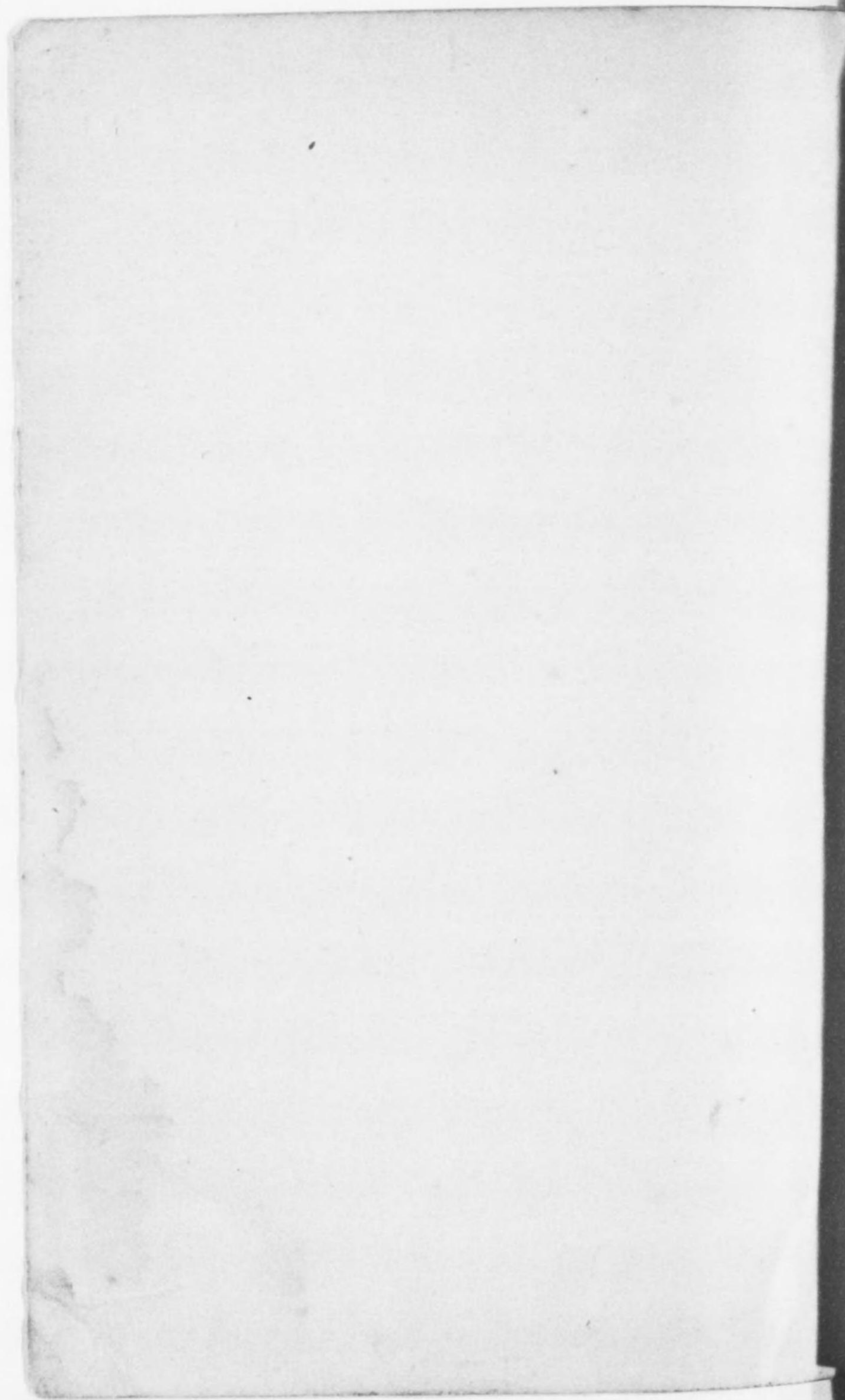
印刷所 株式高松製版印刷所

不許複製

香川縣高松市縣廳前

發行所 株式高松製版印刷所

電話貳壹九四番



終

